
好きの形

良泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きの形

【Zコード】

Z3530D

【作者名】

良泉

【あらすじ】

派遣先で出会った妻子ある彼との恋。こんなに好きになった人は結婚していて…。こんなに好きな人と出会ったのに、自分は結婚している…。心から人を好きになれたのに、好きって言えない苦しさ…数々の修羅場…から、今も続く一人の関係。結末はどうなるのか、今の私にはわかりません…誰にも話せない一人の好きの形の話です。不倫の恋に悩んでいる方へ…

プロローグ

『好き』の形にはいろんな形がある。好きって気持ちは、何も変わらないのに…

私と彼が出会ったのは2年前の秋。

私は、今まで勤めていた会社を辞め、次の仕事を探す為に就職活動の毎日を送っていました。できれば正社員で…と、仕事を探していましたが、27歳の私には、なかなか希望の仕事がなく、保険のつもりで登録していた派遣の仕事をしようか迷っていました。

「『』紹介したい仕事があるのでですが…」

「…うん。」

「今、面接受けている会社があるので、そこがダメだったら、また紹介して下さい…」

派遣会社からの初めての電話でしたが、私は嘘を言つて断りました。

今まで派遣の仕事をした事がなかつたので、派遣社員といつ働き方に、ちょっとだけ抵抗があつたんだと思います。

結局、仕事が見つからないまま1ヶ月が過ぎた頃、派遣会社から連絡がありました。

「仕事は見つかりそうですか?」「…。こんなに厳しいと思いませんでした…」

「1件紹介したい仕事があるのでですが、話しだけでも聞きたくいませんか?」

詳細はわかりませんでしたが、直感で今回紹介される会社で働いて見よう!そう思いながら、次の日派遣会社へ行き2週間からの勤務スタートが決まりました。

1 理想の形

久しぶりの仕事への緊張と、職場はどんな雰囲気なんだろ？…と少しドキドキしながらの初出社。

「今日からお世話になります。西浦美穂です。一生懸命頑張りますー。」迷惑お掛けしますが宜しくお願ひします

私が派遣された会社は、某大手企業の営業事務の仕事。事務所には50名程のエンジニアと営業マン。女性は、私を入れて3名の事務所です。

男性の社員は10代後半から20代前半が5～6人。大半が30代という、活気のある職場の雰囲気はとにかく文句無しの会社でした。

（覚える事は沢山あるけど、…）と仕事したいな～

初日から仕事は沢山あって、覚える事も半端じゃない…。

しかし私は、仕事に対する姿勢は、かなり男らしいといつか…普段の性格も少々男っぽいのですが、忙しい！大変な！等と聞くとともにかく燃えてくるので、そんな私にはぴったりの職場でした。

彼を初めて見たのは、出社2日目。

私は営業1係。彼は営業2係。席も離れていて横顔がチラツと見えるぐらいの距離でしたが、朝のラジオ体操の時に彼の顔を初めて見ました。

（やばい…あの人かっこいい…）

顔だけでは、絶対に好きになつたりしないけど『顔』は私の理想でした。

（名前はなんて言うのかな…？う…んと、安田祐介さんか…20歳ぐらいかな？かなり若そうだな～でも年下はちょっとな…）

顔、理想

でも年下はちょっとな… これが初めて見た彼の印象でした。

係が違う私達は、ほとんど話しをする機会も無く、挨拶程度の会話をするだけの毎日を過ごしていました。

2ヶ月が過ぎた頃には職場の雰囲気にも慣れてきて、週末は同じ係の人達と飲みに行く事が多くなりました。その中でも年齢の近い笹木さんと仲良くなり、会社の事を色々教えてもらいました。

「ね～ね～！会社で誰かタイプの人とか居た？西浦さんはどんな人が好きなの？まだわかんないか？顔だけなら誰かつこいいと思う？」

「顔はね～安田さんかな…かなり好きな顔で、初めて見た時やっぱいつて思つたもん。まだ話した事ないけどね～」「やっぱり！俺嬉しい！安田さんかっこいいよね～俺も男だけどかっこいいと思うもん。顔もだけど、性格も最高だよ！みんなに優しいし男が惚れる人だよ」

自分が褒められたように安田さんの事を話す笹木さんを見て、私も少し嬉しい気持ちになりました。

しかも、年下と思っていた彼は、私より4歳年上。この日から私は安田さんの事が気になりだしました。この時は、まだ彼が結婚している事、そしてこの彼をこんなに好きになるなんてまだ知りませんでした。

2 恋の始まり

相変わらず安田さんは、挨拶程度の簡単な会話だけの毎日。まだこの時は、意識してるのは私だけでした…

飲み会の席で、私のタイプが安田さんと知った笹木さんは、彼のいろんな話をしてくれるようになりました。20代の時のコンバの話し、デパートの化粧品売り場の娘にヒトメボレした時の話し、好きになると安田さんってこんな事してたんだよ…とか

私の印象とは違つて、若い時の彼は、好きになれば電話番号渡したり…積極的な人でした。

(安田さん、あんまり私に話しかけないし、私はタイプじゃないんだな…きっと…)

相変わらず私は挨拶だけで、特に会話する事もない毎日でした。

12月28日。

今日は仕事納め。午前中は仕事をして、午後からみんなで事務所の大掃除！

夕方5時からは、事務所で仕事納めの納会がありました。

私は、あんまり目立たない端っこの席で、お酒を飲めない10代のコと一緒に、ジュースを飲みながら話をしていました。

「西浦さん！ちょっとこっちおいでの

少し酔っ払った声で私を呼んだのは笹木さんでした。笹木の方を見ると、隣には安田さんが座っている…

ちょっと緊張しながら私は、一人の間に座りました 「安田さん！西浦さんとあんまり喋った事ないですよね？」

「うーん。挨拶ぐらいしかないかもね～本当は話しかけたいけど、

嫌がられたらショックだしさ～」

安田さんは、冗談を言いながら、すくかわいい笑顔を私に向きました。

「そりゃ西浦さんね、安田さんの事、一番かつこにいつて思つてるんだよ～タイプなんだつて～！こないだ聞いたやつたんですよ～」

「 笹木さんから、思わぬ一言でした。」

「ちよつと～！何本人に言つてるので恥ずかしいでしょ～」

「別にいいじゃん！かつこいつて言われたら安田さんも嬉しいしょ～」

私は恥ずかしくて、顔を真っ赤にして、照れ隠しに笹木さんを叩いて笑っていました。彼を見ると、彼も顔を真っ赤にして笑っていました…。後で彼から聞いたら、この日から彼の中でも私を意識するようになつたようです

またいつも毎日が始まりました。相変わらず私達は挨拶程度の会話だけでした…

「西浦さん、今日係の飲み会するんだけど来ない？」

久々の飲み会に参加した私は、これまた久々のお酒に樂しくなつていきました。「2次会、いつもの店行こうか！なんか今日は2係も飲み会らしいから後で会流するからね～」

（な）に～！2係？安田さんも居るかな…）

ドキドキしながら、みんなでいつもの店に行きました。

（あ～～安田さんいた！） 店に入ると、安田さんが歌つていました。

（ちょっとお酒も呑んでるし、頑張つて話しかけてみようかな～） なんて事を考えている時、隣に座つてた笹木さんが席を立ち、空いた席に安田さんが座りました。

「ど～も。西浦さんは何飲んでるの？」

ほっぺたを赤くした安田さんが話しかけてきました。「カシスオ

レンジですよ～安田さん歌上手ですね！初めて聞きました

いろんな話をしました。休みは何してるの？車は何乗ってるの？

学生の頃の話や、好きなものの話…

周りがうるさかったので気がつくと、一人の顔が近づいていました。

「こんなに話したの初めてだよね？俺さ、ずっと西浦さんと話してみたかったんだー。会社での西浦さんしか知らないけども、西浦さんってかつこいい人だな～って思つてたんだよね。」

「私も話してみたいと思つてましたよ。もうばれちゃつてるけど、かつこいにな～って最初は思つてて、仕事してるところしか見てないけど、仕事も出来て周りからの信頼もあって、男の人の前の人として尊敬してました…」

お酒が入つてることもあって、彼と沢山話しをしました。

少しして私はお手洗いへ行きました。この店のトイレは男女共同なんですが、私が手を洗つていると、安田さんがトイレに入つてきました。

「あっ！美穂ちゃん」「大丈夫ですか？」

「そんなに酔つてないから大丈夫だよ」

「あんまり飲みすぎないで下さいね～じゃあ私、先に戻つてますね」

「ダメ！ここに居て～一緒に戻ろう」

あんなかわいい笑顔で言われてしまい…私はトイレの鏡で髪を直しながら、彼が出てくるのを待つていました。

ガチャ…

「痛い痛い痛い！」

ドアが開いた瞬間、何か企んだ顔と彼の手が現れ、私は彼に引っ張られトイレの中に入つてしましました（どうじょう。安田さん酔つてるよね。どうしよう…）

嬉しいような、怖いような…何かされるのかドキドキしていまし

た。

酔つ払つた彼は私の肩に手を置いて、下に向いてる私の顔を覗き込みました。「俺酔つてるかな…なんかすごくてキドキドキしてるわ。俺さ西浦さんと本当に話したかったから、話せて嬉しいよ。こんなトイレで話す事じゃないか?酔つてるのかな?美穂ちゃんに酔つてるのか?俺くさいかな?ん?トイレだからか?」

「アハハ!何言つてるんですか!なんか恥ずかしくなってきた!戻りましょうか」

ガチャ…

戻ろうとした時、トイレに誰か入つて来ました。彼は私を見ながら、声は出さずに

(「この人が出たら戻ろうか）

そう口を動かし、そつと私を抱きしめました。そして、私の顔に彼が近づいてきました。

「酔つてますよ…こんなとこで恥ずかし…」

彼に囁きかけましたが、途中で彼とキスをしました。あつという間でしたが、長い時間キスをしていたような…嬉しい気持ちと、お酒を飲んでした事で少し複雑な気持ちになりました。

「この日から何か変わるかな…と思つてましたが、今までと何も変わることなく、安田さんもこないだの事なんて忘れているようないつもの毎日でした。特に電話番号も聞かれる事もなかつたし…（やっぱり、こないだはお酒飲んでたし…キスしたのも覚えてないんだなきっと）

数日後、笹木さん達とカラオケに行く事になりました。私は途中から参加しました。部屋のドアを開けると、先に来てたみんなは酔つ払つて出来上がつてる感じでした。

何曲か歌つてから、私は酔つ払いの相手と部屋の暑さに耐えられず、外の階段で涼んでいました。外で携帯をいじつていると…

「お疲れさん！何してるのこんな所で
そう言って私の頭をポンポンと叩いて隣に座りました。
安田さんでした。

3 好きだけど…（前書き）

派遣先で出会つた妻子ある彼との恋。こんなに好きになつた人は結婚していく…。こんなに好きな人と出会つたのに、自分は結婚している…。心から人を好きになれたのに、好きって言えない苦しさ…。数々の修羅場…から、今も続く一人の関係。結末はどうなるのか、今の私にはわかりません…誰にも話せない一人の好きの形の話です。不倫の恋に悩んでいる方へ…

3 好きだけど…

「あつ…安田さん…お疲れさまです。」

「お疲れさま～こんな所でどうしたの～？」

「途中から来たから、みんな酔っ払いになってるし、ノリについてくの疲れたから休憩してたんです。安田さんは？今まで仕事してたなんですか？」

「働いてたよ～疲れた～帰るつかと思つたら笠木から電話来たからさーでも来て良かつたよー…あのさ…西浦さん…こないだごめんね…」

少し笑つて、いつ向いたまま私に言いました。

「…こないだの事覚えてるんですか？」

「うん。俺嫌われちゃつたかなと思つてさ…覚えてないって言いたいけど…もちろんハッキリ覚えてるよ。なんかチューしたくて、オレちょっと酔つたふりしてたかも…大丈夫？嫌われたかな…」

「嫌つてしませんよ…びっくりしたけど…恥ずかしいような、でもちょっと嬉しかったし…」

「本当に…良かつた～ずっと氣になつてたんだ…」 そう言つて彼は笑顔で私の顔を見た瞬間、ほっぺたにキスをしてお店に入つて行きました。

「よ～し！みんな2次会行くよ～」

(係長…私、今日はここで帰りますね…)

いつもは、3次会4次会…と最後まで残る私ですが、今日は眠くなっていたので、係長の畠山さんに伝え、帰りました。

10分後：

「もしも～し…美穂ちゃん！何帰ってるの！戻つておいで～みんな待ってるよ！今ね…」

笛木さんからの電話でしたが、途中で電話が切れてしまいました。

「ん？誰だろ…もしもし…」

また携帯が鳴りました。登録してない番号でしたが、声は笛木さんでした。

「「じめんね～電池なくなつて電話切れちゃつた。美穂ちゃん、まだ電車乗つてないんでしょう？もつ1軒だけ付き合つてよ～！迎えに行くからわ～～」

「…わかりましたよ～！次で今日は本当に帰りますよ～！最近ちょっと金欠だし…」

「了解！オレ迎え行くからさーこれ安田さんの携帯なんだけど近く來たら電話して～」

「はいはい～わかりましたよ～」

また私は2次会の店に戻る事にしましたが、思わず形で安田さんの電話番号を知る事が出来ました。

(まあ、かける事は無いけど、一応登録しようと…)

安田さんの携帯にも、私の番号が残つているハズなので、かけてくれる事を期待して彼の番号をメモリしました。

『682 安田さん(仕事)』

お互いの電話番号を知ったハズなのに…相変わらず何も変わらない

い私達…

私は、気付くといつも彼の事を考えていました。休みの日にも、ボーッとしながら気付いたら彼の事ばかり考えていました。会社で、他の女子社員と話してる姿を見ると嫉妬する自分がいました…

彼を好きになつていきました。

彼への気持ちに気付いてから少しあつた頃…安田さんと係長との会話に耳を疑いました。

「龍太は元気？今何歳だつけ？」

「あ～4歳です」

「龍太つてさ、ホント祐介そつくりだよね～」

(えつ…えつ…？龍太つて…4歳？えつ…安田さん子供いるの？)
ショックでした…安田さんには、4歳の男の子と2歳の女の子がいました。

2人の子供の父親でした。結婚もしていました…。

たまたま今まで、彼が結婚してる事を耳にしなかつただけだったのか、私も結婚してるの？なんて聞いていませんでしたし…
彼は特に隠してたわけじゃなかつたと思います。左手には指輪もありました。ずっとしてたのか、していなかつたのか今まで気付きませんでした。

彼の事は大好きでした。でも不倫は…憧れの人ではあるけれど、諦めなきやと思いました。

いつもの飲み会…私は安田さんへの気持ちはまだ好きのままでした。こんな事を言つとずるいと思われるが、あの電話がなかつたら…もしかしたら今頃私達は、また違つた暮らしをしていたかもしない…

プルルル…

着信を見ると、先に帰つたハズの安田さんからの電話でした。私は、あの時携帯に番号を登録したんだなと思われるのが恥ずかしくて、安田さんと判らないフリをして電話に出ました。

「はい… もしもし…」

「もしもし。こんばんわ！誰か判りますか？」

「え… 誰でしょ… うか… わかんないですけど…」

「どうも。安田です」

安田さんは、少し酔っ払っているようでした。電話で少し話しかけて、もうちょっと飲みたいので良かつたら一緒に飲みに行こうと いう事になりました。

近くに居たので、すぐに合流してカラオケに行く事にしました。私が歌い終わると、彼は少し眠そうな顔をして、私の膝に頭を乗せて横になりました。

正直、私は心臓がドキドキしていて歌を歌つてゐる場合じゃありませんでしたが、冷静に冷静に…自分に言い聞かせて歌つていました。でもお酒を飲んで、2人きりでカラオケに居た私達は、何度も何度も抱きしめてキスをしました。駄目だとは判りますが、ギュッと抱きしめてもらいました。

カラオケを出たのは、朝の4時…彼の酔いはすっかり醒めていて、少し恥ずかしそうにしながら、手を繋いでタクシー乗り場へ行きました。

「楽しかったね。じゃ、また月曜だね。ゆっくり寝てね」

「私も楽しかったです。じゃまた来週…おやすみなさい」

結婚していなければな… 何度思つたでしょう。

大人になるほど、素敵だなと思う人は、既に誰かの者になつている事が多く、人の者だから、手にはいらないから、奪いたいだけだ… 散々悪く言われるけれど、不倫したくてしている人ってどれくらいいるんだろう。好きって言う思いは同じなのに…

結婚してなければ良かつたのに…

4 一人の距離

さつきまで安田さんとずっと一緒にいた私は、家に帰つてからもボーッとしたまま、気付けば彼の事ばかり考えていました。

やっぱり不倫はダメだ…もつと好きになつてしまつ前に諦めなきや…今なら戻れるという思いと、好きな人と一緒にいた嬉しさ…複雑な気持ちでした。

私は化粧もしたまま、いつの間にか眠っていました。目が覚めたのはお昼を過ぎた頃でした。

(あ〜あ…眠い…)

眠い目を擦りながらも、少しだけ顔が笑っている私が鏡に映つていました。

(あ〜あ…眠たいなあ…よしつーちょっと気分転換に買い物でも行くか〜)

このまま家にいるのももつたいないし、今日はバーゲン初日とう事もあったので、用意をして、化粧もしなおして買い物へ出掛けました。

4時間ほどプラプラ買い物をした私は、少し歩き疲れたので近くのスタバで休憩をしていました。コーヒーを飲みながら、携帯を見ようと手にとると

安田さんからのメールでした。

なんだろう…と冷静に装いながらも、周りの人々が聞こえるんじゃないかというぐらいドキドキしながらメールを見ました。

『お疲れさま！昨日はとても楽しかったです。もしかしたら寝てるかな？俺は書類を片付けに会社来てるよ～仕事だ…また今度はご飯でも食べに行きましょうね～』 RE :

『お疲れさまです～仕事してるんですか～？あんまり無理しないで下さいね！私も、昨日はとても楽しかったですよ ちなみに…私は今バーゲンに来てます～買い物してました～』

『バーゲン！？いいのあつたかな？俺も後から買い物行く予定でした～よし！仕事片付けよつと～』

RE :

『頑張つて下さ～い！』

安田さんが買い物に行く頃に、もしかしたら連絡が来て会えるかもしれない…どこかでそんな期待をしていた私は、一通り買い物は終わつていましたが、またプラプラ時間を潰していました。それから1時間程経つた時、メールが届きました。

『俺もバーゲンで買い物しました！5万使つてしましました～疲れたら～腹減つた～』

RE :

『沢山買い物しましたね～私もまだ買い物中ですけどね～』

『まだ買い物してたの？どの辺？多分近くだよね？』

RE :

『パルコの近くですよ～安田さんは？』

安田さんからの電話でした。

「もしもし～し。ビーも安田です。今さ近くにいるから、この後予定なれば、なんか食べに行かないかい？俺腹減っちゃつて～」

「いいですよ～私も沢山歩いたし、お腹空いたところです。何処に居ればいいですかね…あつ！」

信号待ちをしている人の中に、携帯で話しながら私に気付いた安田さんが、笑いながら手を振つてゐるのが見えました。

「近くにいたんだね～すぐ会えて良かつたよ～何食べたい？」

初めて、私服の安田さんを見ました。スーツや作業着姿もかっこいいのですが、私服はオシャレで更に若く見え、なん倍も素敵でした。一人でパスタを食べに行きました。

お互いホントのプライベートで会うのは初めてだった事もあり、二人ともいつもと違う雰囲気でした。

初めは、どこかぎこちない感じでしたが、だんだん会話も弾んでくると、お互いとまるくなっていました。一人とも沢山笑いました。

「あの…お客様：申し訳ありませんが、当店閉店の時間になりますので…」

「あつーすみません。すぐ出ますね！」

彼との時間は、本当に楽しい時間でした。好きなお笑いの話し。好きな食べ物の話し、好きな物、好きな服…どんな話しをしても、彼と私は『あ～わかる～』『俺もそう～』、考える事、思う事…彼とは本当に気がありました。

不思議と、お互い言葉にしなくても何を思っているのかがわかりました。

ずっと昔から知っていたような、ずっとずっと一緒に居たような…一緒にいると思える、そんな私たちでした。

この日から、私達は毎口メールや電話で連絡を取るようになります。

した。

最初は敬語で話していた私達も次第に、安田さんから祐介君。祐介…

西浦さんから美穂ちゃん、美穂…へ変わりました。パスタを行った以来、二人では会つてませんでしたが、来週久しぶりにご飯を行く約束をしました。

『もしもし～終わったよ～これから帰るよ～寝てたでしょ？』めんね』

『今日も遅かったね～1時過ぎてるよ～疲れたでしょ？お疲れさん～』

『疲れた～でも美穂と話すと元気になるんだ～』

『そうなの？ありがとうなんか…嬉しい』

『美穂。明日は、大丈夫そう？』

『うん。大丈夫だよ。祐介は？仕事忙しいでしょ？』

『まあね…7時には帰りたいんだけど…頑張るわ～仕事の様子連絡するからね。遅くなりそうなら、美穂も時間調整して仕事してて

』

『明日楽しみだね！』

『また明日ね！遅くまで～ごめんね～美穂と話すと気付いたら、いつも1時間は話してるよね…もつと話したいよ…明日楽しみにしてるね ゆっくり寝てね～おやすみ』

久しぶりに一人で会える事になり、私は嬉しくてなかなか眠れませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3530d/>

好きの形

2010年10月22日14時04分発行